

ドナウ の 四季

2015年・春季号・No.26

戦後70年、体制転換26年に思う	盛田 常夫	1
友人に支えられたハンガリー生活14年	小松 裕文	2
「ダイ・ハード2」のほずが	金井 俊文	4
祭りの魅力	バーリント・ドロッチャ	6
かけがえのない日々	サボー・リーヴィア	7
留学生自己紹介	有田 直人・宮田 佳樹・橋本 専史	8
音楽留学情報(2015年)		11
アウシュヴィッツを訪れて	望月 海央	12
GCSEのこと	畑山 去来	13
工夫を惜しまない大切さ	桑名 一恵	14
日本人学校	木村 優菜・小泉 凱斗	15
リスト音楽院ディプロマコンサート		16

戦後70年、体制転換26年に思う

盛田 常夫

鮮労働者を「タコ部屋」に閉じ込め、九州の炭鉱や北海道の開拓で奴隷のように酷使した。戦場には朝鮮人慰安婦を多数送り込んだ。「民間業者がやったことだから政府に責任はない。慰安婦は売春ビジネスだ」と合理化する歴史修正主義が台頭している。帝国日本は中国に満州国を建設し、植民支配を拡大しようと南京を攻略した。他国の領土を支配下におきながら、「侵略の定義は国際的に確定されていないから必ずしも侵略とはいえない」、「南京攻略で殺されたのはみな軍人だから虐殺ではない」という議論が、堂々とまかり通っている。それもこれも、「自虐歴史観を持つ者は反日で売国主義者」という思い込みからきている。

敗戦後も、多くの人が「チャンコロ」や「チョン(チョウセン)」と、中国人や朝鮮人を蔑(さげす)んでいた。国民に根付いた感情は簡単に消えない。「バカチョン」は「馬鹿でもチョウセンでもできる」という侮蔑用語。中国人と朝鮮人への蔑視はネトウヨや在特会に受け継がれている。「何回も謝ったからもう良いだろう」というのは加害者の言い分。加害者が自分の犯罪行為を忘れても、被害者の傷は一生消えないものだ。

日本でもハンガリーでも、メディアは政府の仕返しを恐れて、政府批判を控える傾向が顕著だ。「アカの言っていることは正しいが、貧乏人がそれに染まると就職できなくなる。アカは金持ちがやればよい」というのが、母親の口癖だった。今でも、お上に盾突く「アカ」は社会の敵だと考えている時代遅れの人々も多い。北朝鮮を笑えない。

戦前教育の名残で、我々の中学生時代まで、教師は簡単に生徒に手を出した。他方で、中国戦線にいた図工の教師は、「戦争は絶対いけな」と繰り返した。中国人を池の端に座らせ、日本刀で首の皮一枚を残す首切りを競った。帰国から10数年経っても、自分が手を下した悪夢に奇声をあげて、夜中に家人を起こしてしまうと生徒の前で告白したのを忘れることができない。

我々団塊世代は、こういう戦後社会の中で育ってきた。

(もりた・つねお

「ドナウの四季」編集長)

チェコの体制転換では共産党員を公職から追放する措置が取られた。しかし、旧体制の人材を徹底排除することは不可能で、有能な人材を新しい社会制度の建設に利用しなければならない。公職追放は一定の時間を経て、自然に有名無実化する。この点では日本の戦犯の公職追放も同じである。ソ連との覇権争いから、アメリカは天皇の戦争責任追及を放棄し、ほどなく戦犯の公職追放を解除した。この結果、戦前の体制を支えた人々がさまざまな公職に就くことになった。小林多喜二を撲殺した特高警察の刑事やその上司も、何もなかったかのように、それなりの社会的地位を築いた。もちろん、個々人の良心や社会的倫理は問われるべきだが、大きな変動の渦中で人々は過去の罪を問うことを止め、当事者もまた良心の呵責を覚えることなく自らを免罪する。

このように、政治経済制度の転換が起きても、人々の社会的意識や価値観が自動的に変わることはない。戦後日本の教育内容は根本的に変わったが、旧体制の人々が公職復帰するにつれて、またぞろ古い価値観が頭を持ち上げてきた。平和教育や民主主義教育は次第に廃れ、戦前の過ちから学ぶ教育は限りなく劣化してきた。戦前の苦い体験を糧にした政治家が退場した日本では、戦争を知らない政治家をたしなめる重鎮がいなくなった。それを良いことに、戦後生まれの政治家たちが、戦前の価値観の復活に躍起になっている。

ハンガリー社会主義体制の崩壊の最大の原因は、市場経済を抑圧したために、経済発展に裏付けられた福祉国家を建設できなかったことだ。ところが、オルバン政権はカーダール社会主義政権と同じ過ちを犯している。市場経済の発展を抑制することが、民族国家ハンガリーを発展させることだと信じている。権力者の強い思い込みは、国を滅ぼす。

かくように、日本もハンガリーも、社会が自らの歴史から学ぶことは難しい。

帝国国家日本は朝鮮を植民地化し、朝

ハンガリーと日本の最近の政治を見ると、歴史も社会事情もまったく異なる。二つの国の様相が酷似していることに驚く。政権政党が議席の3分の2を占め、政権批判を極力排除し、歴代政府が逡巡してきた領域へ突進するという独裁的手法がそれだ。過去の過ちから学ぶことなく、強い思い込みが主導する危うい政治だ。人は、政治家は、そして社会は、どうして何度も同じ過ちを繰り返すのだろうか。

拙著『ポスト社会主義の政治経済学』(日本評論社、2010年)で分析した課題の一つが、「社会転換における変化と継続」である。日本が天皇制国家から議会制国家に転換して70年、ハンガリーが共産党独裁国家から議会制国家に体制転換して26年の時間が経過した。その社会的変動のなかで人々は何を学び、何を学ばなかったのか、社会は何を変革し、何を保持し続けてきたのだろうか。大きな社会変動の過程で、人々の意識や価値観はどのような変貌を遂げたのか、それとも旧来の意識や価値観が生き続けているのだろうか。

天皇制国家や社会主義国家が崩壊した日本やハンガリーのように、大きな社会変動は政治経済制度の根本的な転換を帰結するが、必ずしも人々の価値観の転換を伴うものではない。旧体制の支配が崩壊すれば、政治制度の転換は比較的容易に行われる。しかし、社会を構成する人々の意識や慣習、あるいは価値観が即座に変わることはない。なぜなら、人々の意識や価値観は旧体制の社会生活の中で長い時間をかけて形成されたものだからだ。古い意識と価値観は新しい社会体制下でも生き続ける。

社会的価値観の転換を難しくしているのは、社会転換がもつ固有の特性である。人の成長過程では古い細胞が死滅し、新しい細胞が生まれる。これにたいして、社会的転換では、一部の権力者が処刑されることはあっても、ほとんどの人々は社会的役割を変えて生き続ける。それがまた社会の継続性を担保する。社会的役割を変えて新しい社会を構築するところに、人間社会の特徴がある。

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneo Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア
ハイパーサーミアのパラダイム転換— 医術から医学へ
サース・アンドラーシュ / 盛田常夫 [著]



日本評論社

- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

友人に支えられたハンガリー生活14年

小松 裕文

日本に帰国を決めたのは2013年の歳末。いくつかの日本の友人の訃報がきっかけとなった。75歳を前にして体力の衰えと病気や怪我への不安が帰国を決心させた。

ハンガリーの医療施設の貧しさは豊かな日本のそれを知っている者には耐え難いものがある。帰国にあたって最も重大且つ困難だったのはブダペストに隣接するチョメル市に所有する不動産(土地と家屋)の処分だった。

不動産処分顛末記

いくつかの不動産屋に査定を依頼して、最も高い価格をつけてくれたA社のホームページに掲載したのは4月のこと。低迷するハンガリーの経済下では不動産や自動車の売り物件は巷にあふれているが、購入希望者は少なく値段も多くは望めない。8月の末までに見に来た希望者は二人だけ。購入した時の値段よりはるかに安い値段を付けたつもりだが、現状とはかけ離れたかなり高い値段がついていたのだろうか。

9月になって思い切って値下げをし、不動産屋のHPで告知した。すぐに反応があり、二組の家族が見学に現れた。二組目の家族はご夫妻と三人の女の子。非常に熱心に家をチェックし、幾つかの質問もした。帰って1時間、電話で購入したい旨の連絡があった。購入希望額の提示もあって、たちまち商談成立。あっけないほど簡単に決まった。但し、買い手の希望条件は銀行ローンを付けての購入。

問題ありき不動産

銀行ローンをつけるため書類をチェックしてもらったところ、次のような問題点が見つかった。

土地は農業地として登記されていて、家屋が登記簿に記載されていない。この問題を解決しなければ売却不可能。活字にす

れば簡単に思えるが、ハンガリー語を理解できない筆者にはクリアする能力はない。幸いにも友人とチョメル市に住む不動産屋の担当者が奔走して、問題を順次解決してくれ、何とか売買契約にこぎつけることができた。この間3カ月以上、気が重い毎日だった。

ハンガリーでは本来、外国人が農業地を買い取ることができないと聞いているが、筆者の場合は何故かそのケースに当てはまらなかった。購入した時、売買契約書を作成



した弁護士が裏道を知っていたとしか思えない。また登記されていない家屋に12年も住むことができ、しかも正式な滞在許可証を取れたのも、今から考えると不思議なことであり冷や汗ものだった。

農業地を市街地・別荘地に登録する作業は比較的簡単に済んだ。問題は家屋を登記簿に載せる作業だった。この作業は多くの労力と費用が掛かった。家屋はハンガリーがEU加盟前に建てられたもので、前述したように登記簿に登録されていなかった。前のオーナーから渡された図面の家屋は実測したものより小さく書かれており、先ず正確な図面作りから始まった。新築の家を建てるための図面作成と同じ労力が必要だった。また登記簿に載せるためには家屋がEUの定める安全基準を満たしていなければならなかった。具体的には二か所に新たに換気坑を付けることが要求された。居間にある暖炉の改良も要求された。長い煉瓦製の煙突の中にスチール製の煙突を通す作業だった。工事の前に検査官のチ

ェックがあり、実際の工事の後、検査官の再チェックを受けてOKが出たのは作業を始めて2ヶ月後のことだった。

全てが整って、登記簿に載せる作業が最後のステップ。この作業も友人と不動産屋の担当者が作業を進めてくれた。唯一筆者が役に立ったことがある。それはチョメル市の市長と副市長が顔見知りであったため、市の作業期間が大幅に短縮できたことである。

チョメル市とグドゥル県から最終の許可が出たのは12月の中旬。作業を始めて約3カ月のことだった。12月19日に待望の売買契約ができ、29日の日本への帰国便に滑り込みセーフで何とか日本に帰国できた。

友達は宝

ハンガリー語を話せない筆者が帰国にあたって不動産を処分できたのは全て友人のお陰。日本語、ハンガリー語に堪能な彼なしには今回の不動産の売却はできなかつたろう。

ハンガリー14年の生活が大過なく楽しく過ごせたのは多くの友人が支えてくれたからだ。コンピューターやインターネットのトラブル、テレビや電話のセッティングやトラブル、医者や歯医者の相談、その他日常の数々のトラブルを解決してもらったからだ。携帯電話を通して通訳をお願いしたことも数知れない。この場を借りてお礼を申し上げたい。

マエストロ小林研一郎、左手のピアニスト館野泉、リスト音楽院の教授のヴァイオリニストV・サバディなどの著名な音楽家と知り合えたのも、ハンガリー生活での貴重な経験だった。特にマエストロ小林との関わりは日本では経験できないこと。演奏会の追っかけをし、食事を一緒にさせていただいたこともある。ゴルフと一緒にプレーしたのも思い出深い。そんな機会を与えてくださった関係者に敬意を表したい。

ハンガリーのオーケストラは技術的に世界のトップクラスかと思うがそのメンバーと知り合えたのもハンガリー生活の彩りになった。安い団員チケットを斡旋して頂き、一流のオーケストラの音楽を楽しめたのは何とも贅沢な話。メンバーでなければ知らない内輪話もきかせてもらった。

テニスを通して多くの仲間もできた。日本ではなじみの薄いクレコートでプレーをし、息子や娘と同じ年頃の仲間と遊べたのは、精神的にも肉体的にも健康で過ごせた秘訣だったかも知れない。ウイーンでのテニス仲間とプレーした折、マエストロ小澤征爾と記念写真を撮ったことも思い出に残る。ドイツにも多くの友人ができた。特にノイマルクト、ニュルンベルグ、ミュンヘンの友人宅を基地に美術館巡りは楽しいものだった。

多くの人と知り合えてお陰で日本しか知らなかった世界が大きく広がった14年間であった。まさに「友達は宝」である。

なぜハンガリー?

『サンデー毎日』「365日が海外旅行」を読んで始めたハンガリーの田舎暮らし生活だった。「年金で豊かな老後生活」を送りたいという思いは50歳頃、会社の定年10年ほど前から考えていたこと。財産も蓄えも十分でないから物価高な日本ではとても年金で豊かには過ごせない。物価の安い所で生活するしか方法はないと発想の転換をした。

当時「シルバーコロンビア計画」なる構想が厚生省から出され、多くの海外移住、不動産投資のセミナーが開かれており、それを参考にした記憶も残る。候補地として挙げた東南アジア、オーストラリア、ハワイなど等は確かに自然には恵まれ、物価は安い。歴史は浅く、音楽会、美術館などの芸術面などは満足できる環境ではない。

仕事で知り合ったハンガリー人夫妻と交流を始めたのがハンガリー移住のきっかけ

になった。ハンガリーを何度か訪ねるうちにハンガリーの音楽、ワインの魅力にはまり、物価の安さ、オーストリアなど近隣諸国に簡単にアクセスできるロケーションのよさなどがハンガリーに居を定める決め手となった。

千葉県にあった自宅を処分して、ブダペストに隣接するチョメルに900㎡の敷地と150㎡の建物を取得したのは2002年4月。ブダペストを一望する庭にはリンゴ、ナシ、サクランボ、サワーチェリー、ブドウ、桃、プラムなどがあり5月下旬から10月中旬までは取りたての果物が食卓を飾った。サクラ



ンボ、リンゴの収穫期にはブダペスト在住の親子をサクランボ狩り、リンゴ狩りに招くのが恒例なイベントだった。

ハンガリー以外の国を訪ねる機会は多く、楽しみでもあった。陸続きの隣国に簡単に車で行けたのはハンガリーの立地条件が良かったからで、帰国前の10年間でドライブした距離は約23万キロだった。

景色や街を楽しみ、歴史的建造物に接し、美術館、博物館を訪れ、一流のオーケストラやオペラも楽しめた。アムステルダムの国立美術館、ゴッホ美術館、ハーグのマウリッツハイス美術館など質の高い美術館のあるオランダを旅する機会がなかったのは心残りでもあった。

2014年12月29日ブダペスト空港から日本に帰国。群馬県草津町のリゾートマンションで日本での生活を始めた。

なぜ草津?

ハンガリーの不動産の処分と並行して日本での住居探しも重要な帰国作業。

名古屋市、千葉県流山市、長野県原村、諏訪市、佐久市、群馬県草津町など筆者と妻に所縁の町や市を候補に上げた。日本帰国後は一戸建てでなくマンションに住むことにしていた。インターネットの空き家情報は大いに役立った。老人医療が行き届いている原村、諏訪市、佐久市には手ごろな空き家が見つからず、これらの街に住むことは断念せざるを得なかった。名古屋市、流山市は長年住んだこともあり、友人も多いので住み易い所だが、夏のむし暑さは耐え難いものがある。

草津町には流山市在住の頃よく訪れたことがある。妻の友人のリゾートマンションを貸してもらったり、友人と宿泊しながらのゴルフのプレーに訪れたり、筆者の実家のある長野県山ノ内町を訪ねた時立ち寄った場所でもあった。白根山の恵まれた自然は大きな魅力である。日本観光新聞社主催の「にっぽんの温泉100選ランキング」で12年連続第1位に評価されたように、草津は質、量とも日本有数の温泉である。

住居のマンション探しはインターネットを通して行った。幸いなことに長男夫妻が長野県軽井沢町に住んでおりマンション探しや改築工事のために足繁く草津町に足を運んでくれた。お陰で年末日本に到着のその日から新しい住居で生活できた。

立地条件が極めて良く、毎日の生活には車なしで生活できる。町役場、図書館、バスセンター、2軒あるスーパーマーケット、町営プール、数ある温泉施設は全て徒歩圏内。草津町のシンボル湯畑までは徒歩10分の距離である。

春の山菜とり、夏のハイキング、テニス、秋のキノコ狩り、冬のスキーなどこれらが楽しみ。夏の音楽祭にはどんな音楽家が招待されるのかも興味が湧く。

機会がありましたら是非訪ねてみてください。

(こまつ・ひろふみ)

「ダイ・ハード2」のはずが ーハンガリーとの運命の出会い

日本の大学ではファゴットを主専攻として勉強していた。指揮の勉強がしたいと相談した高校生の僕に、指揮科の先生は、「大学に入ったら指揮も勉強出来るから、それよりはオーケストラの楽器を勉強しなさい。室内楽とオーケストラを沢山経験することが、指揮者になるために大事なことなんだよ」とオーケストラの楽器を学ぶことを薦めた。

その後、ファゴットの学生として入学し、在学中は仲間達とオーケストラを作り、様々な場所で演奏を行った。毎日仲間と夜遅くまで練習し、それから誰かの家で音楽について語り合い、そしてまた朝から学校という生活を送った。その頃は、とにかく好奇心だけで行動していた。とにかく毎日が楽しくてしょうがなかった。

卒業後、各地のオーケストラやオペラの現場で指揮者としての修行させて頂き、母校で助手の仕ことを始めたころから、ある疑問が頭の中でグルグル回り始めた。「指揮をするという行為は何なのか、演奏とは何なのか、そもそも音楽って何なのか、なぜ自分は音楽家を志しているのか」。それまで、ただただ「おんがく」が好きで、その気持ちだけで突っ走っていた自分から音楽がどんどん離れて行く気がした。そんな疑問が常に胸の中にあいつつも、時は流れて、ついに疑問が苦しみへと変わり始めた。その時になって、日本の師匠にそのことを打ち明けた。笑顔で返って来た言葉は、「音、我を苦しめると書いて、音我苦(おんがく)。さて、お前はこれから本当の意味での音を楽しむ音楽が出来るまで、音楽と自分自身と向き合っていかなきゃいけない」。そしてさらにもう一言、「一度外国を見て来てごらん!必ず自分自身と向き合うことになるから」。どこへ行きなさいとは言わな

かった。興味のある国はたくさんあったが、しかし、どうしても行きたかった国が一つだけあった。それがハンガリーだった。

早速、リスト音楽院を調べ、今の師匠であるLigeti András先生にコンタクトを取り、1ヶ月の短期留学をすることにした。渡航の2週間前に先生から出された課題は、



ブラームスのハイドンの主題による変奏曲、モーツァルトの交響曲第40番、そしてコダーイのハンガリー民謡「孔雀による変奏曲」だった。しかも、「暗譜で」。初めての海外一人旅で不安、もあったが、その日からハンガリーに到着するまで、ひたすらスコアを読み込んでことを覚えている。

到着の翌日、Ligeti先生と対面した。しかし挨拶から何となく冷たい。外国人という、初対面は笑顔でハロー!!と熱い握手をしてくるイメージがあったのだが。挨拶もそこそこに、お互いテーブルに座り、さっそくどれだけ勉強してきたかのチェックが始まった(先生は正面に座っているが、僕に対して斜め70°を向いている)。

「譜面は開くな。今から尋ねることに何も見ず答えなさい。11小節目にメロディーを演奏する楽器は?」「そのメロディーのクレッシェンドは何拍目から始まる?」という具合に、30分ひたすらブラームスの楽譜についての質疑応答が繰り返された。その間、

金井 俊文

だんだん先生が僕に対して正面を向いてくれるようになった。そして最後に、「ありがとう、出した質問にここまで答えたのは今まで5人くらいだ」と言ってくださった。そこから、どの様に譜面を読み込み、暗譜をすることがなぜ大切なのかを教えてください。

いよいよ、指揮の実技レッスンが始まる。

ピアニストがオーケストラの作品をピアノで演奏し、それをオーケストラとして指揮をする。初日はブラームス。あっという間に約2時間のレッスンが終わり、最後に「(先生)OK、じゃあ次回までにストラヴィンスキーの「春の祭典」を準備して来るように」、「(僕)えっ!? 先生、モーツァルトとコダーイ?」「(先生)ストラヴィンスキーをやろう、その後バルトークの舞踏組曲だ」。両曲共

に指揮のテクニックを存分に駆使する難曲である。この様に、今でも先生は、ニヤッとした顔をしながら僕を試すことがよくある。先生なりのやる気を起こさせる方法なのである。

その後、Ligeti先生とハンガリーで僕のサポートをしてくださっている方々のおかげで、指揮科初のフルタイム留学生としてリスト音楽院大学院に入学することが出来た。当初は、「ゆっくり風景を見て、本を読んで」、そんな留学生生活を思い描いていた。しかし、現実には週に2回の指揮レッスン、ピアノ、スコア・リーディング、合唱指揮、オペラ・コレペティトゥア(伴奏法)、声楽、打楽器、そして各講義、これが指揮科に与えられた必修科目だった。各先生方は常に本気でレッスンしてくださり、本気で課題を与えて、当然こちらの本気を求めてくる。準備をし、少しでも先生方の伝えてくださることに近付こうと必死になる毎日が続いている。

指揮科ではLigeti先生を含め3人の先生から学んでいる。Gál Tamás先生は現在ミシュコルツ交響楽団の指揮者をされており、その作品に適したテンポと深みを自然と創り出すことの出来る先生。そして、Medveczky Ádám先生はハンガリー国立歌劇場の指揮者でもあり、温かな人柄の中に音楽家として生きる厳しさを行動で教えてくださる先生。同時に、オペラ・コレペティトゥアの指導もしてくださっている。これは劇場で働く指揮者が最初に通る道で、オペラのボーカル・スコアを自分で弾きながら歌詞を歌い、歌手を指揮し稽古をつけるという、一人で何役もこなす能力を身に付けるレッスンで、非常にやりがいがある。ハンガリーでの大きな経験として、2015年2月25日にリスト音楽院の仲間たちとオーケストラを作り、ショルティ・ホールにてコンサートを行ったことがある。リスト音楽院とジャパン・ファンデーションのバックアップの下、メンバー集めから自分たちでの手作りで準備したコンサートで、1夜で4つの協奏曲を指揮させて頂いた。日本でも手作りのコンサートは行ってきたが、5ヶ国の様々な考えを持つメンバー達を集めた企画は、不安もあった。しかし、入念な準備とお互い尊重し合った密なコミュニケーションのおかげで、僕もメンバーも多くのことを学び、会場も温かな雰囲気の中で演奏会を終えることができた。

様々な課題にチャレンジしていく中で気付いたことは、自分の「強み」と「弱み」をしっかり把握することだった。自分をよく理解する。それは厳しい環境に身を置くことによって、正直に自分自身と向き合うことで初めて出来ること。弱い部分を乗り越

えて行くためには努力と勇気が必要で、過去の経験がそれを助けてくれるのだと感じた。そこから育まれた自分の人間性が自分の音楽性となると思う。

ところで、何故どうしても行きたい国がハンガリーだったのか、ハンガリーとの最初の出会いについて書きたいと思う。それは中学生の時のちょっとしたミスから始まった。

当時、日曜洋画劇場という洋画を放映する番組があった。その日は映画「ダイ・ハード2」、次の日にゆっくり見るつもりで録画予約をした。翌日、ワクワクした気分で、録画したはずのビデオを再生したら、思いがけないものが録画されていた。「ハンガリー国立ブダペスト・オペレッタ劇場日本公演」。なんだこりゃ! 前日の新聞を見て驚いた。僕は間違えて「日曜洋画劇場」でなく、教育テレビで放映されていた「芸術劇場」という音楽や舞台公演を放映する番組を録画してしまったのである。自分の凡ミスに腹立たしさすら覚えたが、聞こえてくる序曲にすぐに心を奪われた。エメリッヒ・カールマン作曲(ハンガリー名はKálmán Imre) 喜歌劇「チャールダーシュの女王」だった。これが僕のハンガリーと、そしてハンガリーに憧れを抱ききっかけとなった作品である。ハンガリーの情熱的なチャールダーシュとウィーンの甘いワルツなど、ハンガリーとオーストリアのエッセンスを見事に融合させた音楽。ドイツ語での上演が一般的なオペレッタ(喜歌劇)作品を自国の誇りを持ってハンガリー語で上演しているブダペスト・オペレッタ劇場。どこまでも聴衆を楽しませようとする舞台に釘付けになった。それから間もなく、日本で唯一発売され

ていたブダペスト・オペレッタ劇場のCDを手に入れることが出来た。演目は同じくハンガリー生まれの大オペレッタ作曲家フランツ・レハール(Lehár Franz)の傑作、「メリー・ウイドウ」だった。ハンガリー語で収録されていたこのCDを、中学・高校の登下校時、毎日聴いていた。もちろんハンガリー語は何を言っているか分からないが、何故か温かみを感じていた。このCDの演奏を指揮していたのが何と日本人であった。現在、ソルノク市立交響楽団の音楽監督として活躍されている井崎正浩氏であった。氏は日本人として初めてブダペスト・オペレッタ劇場に招かれて指揮をされていた方で、僕にとって当時から憧れの人だった。それから約10年後、ある偶然の誘いにより、井崎先生が音楽監督を務める日本のオーケストラで働かせて頂くことになり、不思議な縁を感じ、嬉しい気持ちであった。

今年6月18日にディプロマ・コンサートを行い、リスト音楽院の指揮科を卒業予定である。現在は、ブダペスト・オペレッタ劇場でリハーサルや本番を見学し、どの様に舞台が作られていくのかを学ばせて頂いている。今後もこのオペレッタの本場の地で多くの素晴らしい作品を研究し、いつか上演に携われるよう、語学も含め必要な能力を引き続き向上させていきたい。オペレッタには、単なる芸術作品としてだけでなく、観る者に幸せと活力を与える力があると信じている。その魅力を伝える側になるためにも、日々自分自身と向き合い精進して行こうと思う。偉大な先輩方がそうしている様に。

(かない・としふみ)

リスト音楽院大学院指揮科)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。
<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

祭りの魅力

Bálint Dorottya

私は留学に来て初めて日本の祭りを体験して、それ以来すっかり祭りの虜になってしまいました。実は、だいぶ前から神道や様々な伝統儀礼に興味を持っていて、本の中で知った不思議で美しい世界を実際に自分の目で見るのを楽しみにしていました。

この夢は2013年10月のある綺麗な晴れた水曜日に叶いました。待ちに待った人生で初めて、日本の祭りである「時代祭」を見に行くことができました。その時のわくわくして落ち着いていられなかったことを思い出すと、今でも笑みがこぼれます。でも、これまで経験してきたいろいろな祭りを少し振り返ってみると、「時代祭」は華やかで印象的ではありましたが、それ以降に訪ねた深い宗教的な意味を持つ祭礼ほどの魅力はなかったと思います。

神様の降臨を告げるホラ貝の音。空間を清める線香の香り。神様に供える白い御幣。最初はこのような様々な道具の意義はおろか名前さえさっぱり分からず、ただ視覚、聴覚、嗅覚だけで体感した神秘的な雰囲気呑み込まれてしまいました。「巫女さんはあの杖を一体何のために振っているのだろうか?」「あの人が担いで運んでいる箱の中には何が入っているのだろうか?」などと考えた記憶があります。今ではもう櫛の枝と神輿の役割を知っていますが、神話と民俗学の授業でこのような知識を身につける前にも、祭りで見たり聞いたり経験したりしたことの重要性、そのうまく言葉にできない感覚に圧倒されました。「ああ、神道の祭りはこういうものなんだ」と理解できたような気がしました。やっぱりこれも、他の数多くの文化的な要素と同様に、実際に行ってみないと分からないことの一つです。

大阪に留学することができたのは、何よりもありがたいことだと思っています。祭り好きな私にとって、日本三大祭に数えられる祇園祭や天神祭もここ、関西で開催されるのはとても嬉しいのです。それに、長い歴史を持つ京都と奈良も簡単に行ける距離にあり、数えきれないほどの神社とお寺を訪れることができます。

奈良といえば、今までで最も強く心に残ったのは春日大社の「春日若宮おん祭」です。夜12時から始まる行事は街の光が差し込まない真っ暗になった公園の中で行われ、まるで神様が本当に人間の世界に降臨してきたような、厳かな雰囲気を漂わせています。その夜の魅力といたら、鳥肌が立つほどでした。

大阪から少し離れた場所でも思い出深い1日を過ごしたことがあります。2013年の春に、姫路で20年に1度しか執り行われぬ「三ツ山大祭」を見に行く機会がありました。そして、今年の雛祭り



には、和歌山の海辺に面した淡島神社の「雛流し神事」に参加しました。地元の人々とともに神輿を担いだのは一生忘れられない経験になりました。

最後に、私が最も大事に思っている町、大阪。神話の先生のおかげで、関西以外の地方ではほとんど知られておらず、地元の人でさえもあまり知らないような祭りに参加できる機会が何回かありました。その一つは堺市の「やっさいほっさい」と呼ばれる火渡り行事でした。屋台が三つしかなかったことは、祭りが小さい証拠とも言えるでしょう。けれど、人が少なかつたにもかかわらず、いや、もし

かしたらだからこそ、次第に消えていく炎を見つめながら気分が高揚し、参加者の間に微妙な一体感が生まれた気がしました。そして、できるなんて思ってもいなかった経験もしました。列に並んでいた人々に加わり、ドキドキしながら残り火の上を渡ったのです。その夜は、地域的で小規模な祭りの魅力と素晴らしさを決して忘れてはならないと実感しました。

大阪天満宮の「うそ替え神事」に行ったときも、同じような感想を持ちました。皆さんはこの行事をご存知でしょうか。「うそ替え神事」の目的は、過去1年間についたうその穢れを祓い、うそを誠に替えることです。流

れは次の通りです。まず、本殿横に並び、無料で配られる、神事に必要なお守りが入った小さい紙袋を手に入れます。太鼓が打ち鳴らされたら、ぐるぐる回り始め、「替えましょう、替えましょう」と言いながら、袋を周りの人々と何度も交換していきます。実は、残念なことに、私が天満宮に着いたとき、お守りの配布はすでに締め切られていたので、実際には神事に参加できなかったのですが、それでも嬉しく、記憶に残る日になりました。賑やかな人ごみを回りながら、老若男女の笑顔を見て、その楽しさを感じることができたのです。知らない人同士なのに、心の中に同じ目的を抱いていることで、わずかな時間の間につながりができるのは素晴らしいと思い、感動しました。また、なぜか多くの方は私とお守りを交換したがっていたので、楽しい気持ちになりました。

最近、「私はなぜこんなに祭りにハマっているのだろうか」とたまに考え込みます。それは、やはり祭りには魔力のようなものがあるからだと思います。

普段はあまり活気のない場所でも、祭りになるとたくさんの人で賑わい、別のところのように思えます。地元の人であれ観光客であれ、日常と異なる精神的状態になり、普段見えない顔が見えてきます。これからも熱心に日本全国のいろいろな祭礼を訪れ、素敵な思い出をたくさん作りたいと思っています。

そして、祭りの魅力を他の人にも感じてもらうことができれば嬉しいです。

(バーリント・ドロッチャ ELTE日本学科)

かけがえのない日々

—城西大学での留学体験—

Szabó Lívía

日本へ来て、はや6か月。「ハンガリーにいたときと比べて何が変わったか」と聞かれたら、最近「寝るのも起きるのも遅くなりました」と答えています。日本に来たばかりのときには、「慣れることはできないだろう」と思うような違和感や問題が色々ありました。ゴミの分別や、ゴミブリ、左側通行、終電のあと帰る方法はほぼタクシーだけ、池袋駅で迷ってしまうことなども最初のストレスの原因でした。しかし、心配していたよりもずっと早く、あっという間に慣れてきて、今ではもう日本の住民だという意識を持って暮らしています。生活にもほとんど問題がないし、どこかに行くのも普通になって、迷わずにどこにでも到着できるようになりました。時々、日本で新しく身につけた癖にも気がつきます。もしかしたら、これを読んでお気づきになった日本人の方々はどう笑っていらっしゃるかもしれません。最近身につけた新しい癖というのは、電車の中での居眠りです。

留学生ですから、もちろん、こういった日常なこと以外に、日本の大学生活や日本文化も体験しています。私は埼玉県にある城西大学というところで勉強しています。「現代日本の法と政治」、「国際関係と国際経済」、「論理的思考法」などの授業があります。最初はずっと集中して先生の話を聞くのは難しかったですが、専門用語を覚えたあとは、だんだん楽になってきました。しかし、試験期間に入ったときにはびっくりしました。1か月間以上あるハンガリーの試験期間と違って、こちらの大学では試験期間は大体2週間で、追再試験はその後の2週間で行われます。ハンガリーでは試験期間に少し余裕がありましたが、日本では試験期間が短いため、暇が全然なくて図書館で勉強ばかりしていました。必死で勉強したおかげで、追再試験を受ける必要はありませんでした。だから、春休みは早く始まって、色々な所へ行くことができました。太平洋、渋谷交差点、ハチ公の像、皇居、新宿御苑、武道館、エルテ大学時代に学んで気になっていた靖国神社、明治神宮、川越小江戸、京都、奈良、大阪などです。



こういった、ふつう留学生が体験する勉強や旅行や遊びのほか、特別な体験もさせていただくことができました。城西大学では、留学生が将来のために様々な経験を積む活動があり、そちらにも参加しているからです。会議やカンファレンスが多く、チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキア、中国、日本などから来た研究者や大学教授、外交官などの講義を受けることができます。それによって、世界についてもっとよく知ることができ、貴重な人間関係も築くことができました。大学の教授達とも良い関係ができたおかげで、色々なことについて議論したり、自分の意見をはっきり発言したりできるようになりました。このようなことを通して、留学生として私たちは世界についての見方が広がったため、もっと自信を持てるようになりました。

そして、その自信のおかげで、色々な責任を請け負うことができるようになりました。例えば、文化祭のブースでの仕事、ハンガリーのクリスマス文化紹介、民族衣装を着て歌ったり踊ったりすること、通訳や翻訳、動画撮影、会議にいらっしやるゲストたちのお迎えと手伝いなどです。今までの6か月間では、責任感や、正確さ、締切の遵守、他の文化や人々、国ごとの働き方の違いなどを受け入れること、などもほかの留学生達とともに徹底的に学びました。会議、美術展の開会式、文学紹介などの正式なイベントがよくあるので、小学生の頃は嫌いだったフォーマルな服装も好きになりました。ちゃんとした大人という感じがするからです。

これを読んでいらっしゃる方々がどんな感想をお持ちになるかはわかりませんが、私たち留学生にとってはこの1年間はただの留学ではなく、インターンシップのような感じです。つまり、これは私たちが大人になるための道です。まだ、勉強しないといけないことは色々あります。体験して、理解しないといけないことも山のようにあります。しかし、今までの経験に基づいて、これからも、日本学科の卒業生として日本文化や日本人の精神を子細に観察して学び、社会にとって役に立つ人間になるために頑張っていきたいと思います。

(サボー・リーヴィア、ELTE日本学科)

留学生自己紹介

私の留学生活

カーロリ・ガーシュパール大学

有田 直人

私は現在、カーロリ・ガーシュパール大学で、主に英語とハンガリー語を学んでいます。いろいろな国の歴史に関心があるので、歴史の授業もいくつか受けています。ブダペストの街は壮麗で、美しいヨーロッパ風の町並みに惹かれています。日本とはすべてが違った景色で新鮮です。海外に行った経験は何度かあったのですが、ヨーロッパは初めてです。東アジアを旅行した時には家族や友人と一しょだった上に、ガイドさんもいました。1人で海外へ、それも行ったことのないヨーロッパ、しかも



旅行ではなく留学です。留学する直前はわくわくした気持ちもあったのですが、やはり不安もありました。しかし、実際に来てみると見知らぬハンガリー人の優しさに触れたり、友達ができたりと、今ではブダペストでの生活にも慣れ、楽しい毎日を送っています。

語学力の乏しい私にとって授業についていくのに必死です。周りの学生は先生が話していることを上手にまとめてノートにまとめていくのに、私は部分的にしか聞き取れず、ノートにまとめられないこともしばしばです。また、日本の学生とは違い、先生が意見を求めると積極的に発言していく学生たち。私の場合は、意見を求められて発言しようとするも、スピーキングの力がなく、うまく自分の言いたいことが言えません。英語でのプレゼンテーションや口頭試験など、日本ではなかなか経験できないことです。

授業といえば、カーロリ・ガーシュパール大学には日本語学科があり、日本語専攻の学生とよく話しています。韓国や中国のように近い国の人たちが日本語を勉強しているのはイメージしやすいのですが、ヨーロッパ、とくに東欧の人たちは日本のどのよう

な理由を聞いてみると、日本の文化に興味がある人、日本語の音が好きな人、日本の武道をしていた人、アニメや漫画が好きな人など、さまざまでした。彼らと話していると、日本人だからこそ日本のことについて気づかない部分もあり、聞いていて楽しいです。日本語学科の授業にアシスタントとしていくつか出させてはいただいています。教えることの難しさを痛感しています。普段当たり

前のように日本語を使っていましたが、教えるとなるとこんなにも難しいとは思いませんでした。私もこちらでハンガリー語を勉強していますが苦戦中です。こちらでの生活では、勉強面以外では友人と飲みに行ったり、パーティーがあったり、ハンガリー各地を旅行したりと充実した日々です。旅行した各地でも、ブダペストとはまた違った雰囲気が味わえて楽しいです。まだ行ったことのない地域やまたはほかの国に、新たな発見を求めて旅してみたいと思います。それと私の中でBikás Parkはお気に入りの場所です。来たばかりのとき、赴くままに歩いていたら偶然着いたその公園では、子どもと一緒に遊ぶ親、噴水のような場所ではしゃぐ子どもたち、犬の散歩をしている人、バスケットボールの練習をしている人、ランニングや筋トレをしている人、アイス屋さんの前で列をつくって並んでいる人、いろんな人がそれぞれの理由でその公園に来ており、私には印象的な光景でした。最近季節も暖かくなってきたので、私もバスケットボールを買って、ときどきBikás Parkで遊んでいます。小学生に話しかけたら、仲良くなって一緒にバスケットをす

る、なんてこともありました。天気の良い日には最高の場所だと思います。このような新たな発見などがあるので、散歩はして楽しいです。また、クリスマスのときには友人の家に招かれた機会があったのですが、クリスマスツリーのそばにプレゼントを置いて家族に渡すなど、映画などでみたことがあるような情景でした。ハンガリー人は家族をとて大事にするということを感じさせられました。私も家族をもっと大事にしなければと思わせてくれます。上にも書いたように、私は語学力に乏しいです。語学力の低さからうまくコミュニケーションがとれず、言語の壁に悩まされるのですが、最近では英語でもハンガリー語でも、「以前より上手になった」と言ってもらえて嬉しく思います。このような小さな成長を励みに、もっと頑張ろうと思うようになります。日本語学科の学生や先生方、英語の先生方、留学生やハンガリー人学生、そのほかここで知り合った人、みんながみんな優しく、手を差し伸べてくれます。勉強面以外でもたくさん助けてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。こうした手助けがなければ、私はこの留学生生活を四字熟語で例えるなら、「一期一会」が相応しいような気がします。日本に帰ったら、会えなくなる人がいるかもしれない。だからこそ今の出会いを大切にしていこうと思います。

日本の大学の教授とのメールのやり取りで、「何事も前向きに捉えて良い経験だと思って頑張ってください」と送られてきた文面が、頭の中にずっと残っています。そう、すべて経験です。言語の壁や文化の壁にぶつかると、ときに悔しい思いや悲しい思いをすることもすべてが経験です。日本では経験できない、今しかできない経験です。残りの留学生活もわずかとなってきました。日本に帰ったときに少しでもみんなに自分の成長を伝えられるように、頑張りたいと思います。

（ありた・なおと）

（ありた・なおと）

（ありた・なおと）

（ありた・なおと）

留学生自己紹介

縁ある場所で

Central European大学公共政策学部

宮田 佳樹

私は高校を卒業するとすぐに、アメリカの大学に入学するために渡米しました。渡米後は1年間の英語のプログラムを経て、翌年4年制の大学に入学。在籍していたのが教養学部だったので、多くの学問を幅広く学びましたが、とくに経済学を中心に、真剣に学びの大学生活を送りました。渡米してすぐの頃は、大学卒業後はアメリカ国内の大学院に進学することを考えていましたが、世界中の大学院を選択肢に入れて考える中で、ハンガリーのブダペストにあるCentral European Universityの公共政策学部が候補のひとつになりました。

大学院を選ぶ過程の中で、大学院の所在場所を全く考慮に入れていなかったのが、Central European Universityがどこにあるのか調べたのは、受験することを決めてからでした。運よく採用をされることができ、総合的に判断し、ハンガリーに来ることを決めました。実は、私の学部時代の指導教官が、教鞭を取ったことのある大学でもあったので、不思議な縁を感じました。

大学院のプログラムが始まる直前にブダペストに到着しました。まず、驚いたのが、ブダペスト市内では比較的英語が通じたことです。ハンガリー語が全く分からない私は、言葉の分からないところでの生活がどうなるか不安でしたが、買い物や交通で困ることはほとんどなく安心しました。そして、ドナウの真珠と呼ばれる綺麗な街並みと、ドナウ川の悠久の流れを初めて見たときは、その美しさで大変感動しました。

私の大学院のプログラムでは、授業は全て英語で行われ、学生もその多くが留学生です。時に、授業中に教授も含めて誰もハンガリー語が分かる人がおらず、教室にあるハンガリー語対応のコンピュータのキーボードを誰も扱えず困ることもしばしば起こるぐらいです。この国際性豊かな環境で勉

強していると、自分がハンガリーにいることを忘れてしまいそうになることすらあります。東欧と西欧の中間に位置するハンガリーに、世界中から留学生が集まり、議論し、学びあう場ほど貴重なものはないと感じています。歴史的にみて良い事ばかりではなかったハンガリーにおいて、学生たちが普遍的な価値を見出すために、切磋琢磨する環境に、大変感謝しています。

所属する学部は公共政策学部であるため、政治、経済、法律、人権、研究手法に至るまで、幅広く学んでいます。違ったバックグラウンドを持つ学生たちの発言はとても新鮮です。今まで自分が持っていなかった視点から、問題を追究し、考察していくのを実際に目にし、自分と違う文化を持つ人と対話することの重要性を強く感じました。私たちは共通点からだけでなく、むしろ他者と



の違いから深く物事を学ぶことができます。私自身、多くのことを、クラスメイトから学んでいます。

素晴らしい環境の中で学べるとはいえ、勉強をするのは大変です。毎日、学校とアパートを往復する日々で、レポートや課題の締め切りに追われながら生活するのはとても疲れます。そういったとき、思いついたようにドナウ川沿いを散歩すると、たゆみな

い川の流れが、疲れを解きほぐしてくれるように感じます。

日々の生活においては、冬は日本より多少寒く、大学時代に温暖な土地で暮らしていた私は、寒さに閉口するのではないかと考えていましたが、意外なほどに対応できました。暮らしてみた実感では、体感する温度は寒いというよりは、冷たいと感じました。冬の冷たさを越え、春の訪れを実感したときは、大変に気分が良かったです。

学校の勉強の忙しさにかまけて、ハンガリー語の勉強が遅々として進みませんが、せっかくハンガリーという縁ある地に来たので、言語やハンガリーの文化も積極的に学んでいきたいと思っています。

日々接するクラスメイトは留学生が多いので、ハンガリー文化に完全に浸かっているとはいえませんが、ハンガリーのことをで

きるだけ知っていきたいです。不思議な縁で出会った友人たちから多くを学び、社会にとって有為な人材になるために、ハンガリーの地で、懸命に学んで参ります。

（みやた・よしき）

留学生自己紹介

これから、留学される方へ

リスト音楽院大学院チェロ科

橋本 専史

今日は2015年3月24日です。あと3ヶ月で僕の留学生活は終わります。1年間パートタイム学生として、そして2年間大学院生として過ごした立場から、留學生活の感想、思い出を、今から書かせていただこうと思います。

まず、留学はとても辛かったです。言語の壁、留学生としての立場。なにひとつ現地に住んでいる人より有利なことが無いわけです。書類ひとつ書く、読むのにも何時間もかかり、知り合いをつくるのにもとてもエネルギーが要ります。

そこで鍛えられたのが、「恥をかくことを恐れない」ことです。今でもハンガリー語の語彙は非常に乏しいのですが、とにかく何か喋る、チャレンジする姿勢を維持する努力をしています。これが非常に辛いですし、



他人から見るとかっこ悪いと思います。しかし、苦労した分得られるものがとてつもなく大きいことに味を占め、僕は今ではこのスリルを楽しんでいます。とはいえ、言語は直ぐに喋れたほうが絶対良いですから、これから留学される方には、日本で楽器の練習をすることよりも、言語の勉強を強くお勧めします。

これは余談ですが、何かとてつもない面倒に挑戦した日の自分の目を鏡で見ると、瞳孔がガツと開いて、自分がまるで別人のように見えることがあります。その状態で人と会ったり、お酒を飲んだりすると、話がと

ても弾みますし、上手い酒が飲めます。

逆に日中家に引きこもりダラダラした時の顔、これがとても酷くて、人と会えるような顔じゃ無いんです。僕はこのように自分の目を見て1日の生活を振り返っていました。そして実際、毎日充実した学生生活を送るのはとても難しかったです。

次に、留學生活の思い出として僕が絶対にお話したいのが、講習会です。ハンガリーでの留學生活も濃いものですが、講習会には敵いません。留學中に僕はオーストリアでの夏季講習会、そしてドイツでのチェリストのための講習会に行きました。

オーストリアでの講習会はISAと呼ばれるもので、ヨーロッパだけでなく世界中からオーディションで奨学金を得たハイレベルな学生だけが集まってきました。そこでは毎日のレッスン、毎日のコンサート、そして毎晩のパーティ。寝床も相部屋で、僕はイスラエル人ヴァイオリニストとブラジル人チェリストと3人で2週間共同生活をしました。部屋では演奏を聴き合って意見交換したり、留學先での悩みを打ち明けたりもしていました。

ハンガリーに住み、勉強している僕には、僕自身の価値観とハンガリー人にたいする断片的な価値観しか無かったわけですが、ここでまた新しい価値観を沢山の学生と共有(という名のパーティ)することで今までの自分を見つめ直すことができました。

1年近く前の講習会ですが、今でもその時の仲間と会ったり、メッセージのやりとりをしています。

ドイツでの講習会は2015年3月初旬から1週間行ってきましたが、まず驚いたのがドイツ人の手際の良さです。ハンガリー首都ブダペストからドイツのデュッセルドルフまで飛行機で移動したあと、講習会の会場リンゲンまでは電車で乗換え1回2時間半かかります。いい加減な僕はどこで乗換えするのか調べていなかったのでチケット窓口、「今からリンゲンまで行くのだけど、どこで乗換えするか分からないから、乗換え

駅を教えてください」と、半分くらい言いかけたその時です。窓口の方がA4紙にパパッと出発時刻から乗換え駅まで記した時刻表を印刷してここに寄越したのです。講習会に着く前の出来事でしたが、その時僕は感動しました。そして、この手際の良さは私たち日本人にも通じるものがあると思いましたし、日本人の手際の良さを失いかけている自分に危機感を抱くこともできました。

現地の講習会では1日1回1時間のレッスンを5人もの先生から受講することができました。普通、講習会の最中は同じ先生に指導していただくスタイルだと思うのですが、この講習会は特別でした。1人の先生からのアドバイスでもこの先1年位かけて解析していきだるうに、5人の先生から5日間に頂いたアドバイスを、これから僕はどう処理していけばよいのか、分かりません。しかし、それが逆に嬉しくもあります。

さらに、チェリストの為の講習会がゆえに、学生全員参加のチェロアンサンブルの場が用意され、僕もトップチェリストとして参加させていただくことができました。13歳から29歳迄の学生で、この講習会の為だけに編曲された作品を毎晩練習し、夜は学生と教師、講習会スタッフ入り乱れて酒を飲みながらピリヤード、卓球、テーブルフットボール、もうお祭り騒ぎでした。ここでもやはり、言語が達者だと楽しめます。

あらためて3年間の留學生活を振り返ってみると、自分が幸せを感じる瞬間は、人と喋っている時が殆どだったと思います。留學生活は音楽を勉強する場ではありませんでしたが、それ以上に外人との交わりから得たものが多かったのではないかと僕は思います。

来月の卒業コンサートではリスト音楽院や講習会で勉強した曲を演奏します。成績がつくわけですから演奏のクォリティーも大事ですが、それ以上に僕の留學3年間の体験を体現することを第一に考えて準備をしていこうかと思っています。

(はしもと・あつし)

音楽留学情報(2015年)

リスト音楽院をはじめとする各音楽科のある大学にはパートタイムコースとフルタイムコースがあります。

1. パートタイムコースは半年単位。自身で在籍期間を決められる(半年単位で延長可)定期試験はなく、実技のレッスンのみを受けるコースです。

入学資格は18歳以上です。日本人留学生の多くはこちらのコースに在籍されています。

入学試験は専攻楽器の実技のみで行われます。

授業は、英語またはドイツ語で行われます。※2016-2017年度から英語検定証明書が必要となる。

ハンガリー語の能力は入学条件として必ずしも求められませんが、生活することを考えると日常会話程度は勉強しておいたほうが良いでしょう。現在では日本人留学生の為にハンガリー語の授業がレベルに合わせて受講できます。(学費の中に入っています)

卒業証書は授与されませんが、コース修了証が発行されます。

2. フルタイムコースはBA(Bachelor:学士)3年間。MA(Master:修士)が2年間。日本の音楽大学同様、学科を含めた単位を取りながら卒業試験(ディプロマコンサート)での卒業及び演奏家資格を取得します。

入学資格試験は専攻楽器の実技のほか、音楽理論、ソルフェージュなどが行われ、各教授・講師陣によって合否が決定されます。授業に関して留学生は主に英語での授業を取得する事が出来ませんが、専攻科目ではハンガリー語の授業を受けるものもあります。卒業論文はハンガリー語または英語で書く必要があります。

3. ピアノリストコース (リスト音楽院のみ)

今年度試験日は2015年6月下旬か7月上旬

授業料は9000 EUR / 2 semesters 1年間修了

授業内容:実技レッスン・室内楽レッスン・オーケストラ実技・セルフ・マネージメントスキルなど。

現在の留学生の皆さんは、初年度はパートタイムで留學し、次年度にフルタイムを受ける方が多く見られますが、マスター(MA)の場合、日本の音楽大学卒業後すぐに入試を受ける方も少なくはありません。リスト音楽院に留學する日本人の多くは音楽大学を卒業された方ですので、演奏技術はかなり高いものが要求されると思います。

4. 日本で留學資格を得るには、以下の方法が考えられます。

・各音楽大学の留學制度を利用する

・岐阜県とリスト音楽院の共催で7月下旬から8月上旬に開催するマスターコースを受講して、期間中に行われる入学権利(パートタイム)がもらえる試験を受ける

・2月に札幌で開催されるリスト音楽院セミナーを受講して、セミナー期間中に行われるリスト音楽院への入学権利(パートタイム)がもらえる試験を受ける。

・日本学生支援機構が募集している・ハンガリー政府Stipendium

Hungaricum奨学金、または各奨学制度を利用する。

このほかにも、個人で留學方法を模索し、単身ハンガリーへ来て入学試験を受ける方もいらっしゃいます。いずれにしても、各専門の演奏技術はある程度のレベルが求められると思います。

語学力はある程度必要ですが、その他は日本の音大に入学できるレベルであれば充分対応できると判断いたします。

リスト音楽院では 2016-2017の学年度に向けて全日制(学部・大学院)での留學を希望し願書を提出される方は、入学試験当日有効であるTOEFL IBT英語能力試験証明書を願書と共に提出することが義務付けられます。<http://lfze.hu/for-japanese-applicants>

【参考情報】

☆リスト音楽院公式サイト

(英語)<http://www.lfze.hu/hp/english/index.html>

☆リスト音楽院へ留學者を多数派遣している、岐阜県ハンガリー友好協会のサイトです。 <http://www.gifu-hungary-fa.com>

☆札幌で開催されるリスト音楽院セミナーの内容が書かれたページです。 <http://www.kitara-sapporo.or.jp>

☆ハンガリー政府Stipendium Hungaricum奨学金

http://ryugaku.jasso.go.jp/scholarship/scholarship_foreign/hungary/scholarship_hu_stipendium/

【留學の流れ】

1. 留學は短期留學(パートタイム・フルタイム・ソリストプログラム)で自費留學です。留學に関する手続きは本人が行ってください。

2. 入学試験申し込み手続きは、応募は2月スタート4月下旬前後にリスト音楽院に届くように郵送もしくはメールを送る。住所は申請書に記載されています。

※今年度(2015-2016年留學生対象)ですと、7月下旬に音楽院から合格通知及び入学許可書が郵送されて来ます。それから期間は短いですが、速やかにビザ申請等を行ってください。

<ビザ申請・取得>ハンガリー共和国大使館

〒108-0073 東京都港区三田2-17-14 NSビル

TEL: 03-3798-8801 FAX:03-3798-8812

3. ハンガリーの住まいについては、各大学の留學生課もしくは国際留學生課でも十分な情報を得ることができます。基本的な手続き等は各自で対応します。

☆現地での音楽留學サポート情報

住居・ビザ申請関係や現地の様子など、ご相談してください。

迅速・丁寧に対応いたします。

<問い合わせ先>

会社名: Propart Hungary Bt. (音楽企画&マネージメント会社)

担当者: 桑名 一恵(くわな・かずえ)

連絡先: +36-70-381548

e-mail: proparthungary@upcmail.hu

または proparthungary@gmail.com



みどりの丘補習校



アウシュヴィッツを訪れて

みどりの丘日本語補習校
高等部 望月 海央

秋休みに僕は、家族と一緒にポーランドにある強制収容所、アウシュヴィッツを訪問しました。行ったきっかけは、母がどうしても僕にアウシュヴィッツを見せたかったからです。遠くて寒いポーランドに、最初は行きたくありませんでした。しかし、アウシュヴィッツは歴史的に重要な場所ですし、世界遺産でもあるので一生に一度は見に行きたかったと思います。行くことにしました。

10月のポーランドはハンガリーの冬よりも寒く、上着や下着などを4枚も着ていたのに、まだ寒かったです。秋に4枚着ていても寒かったのに、冬でもベラベラの服で一日中外で働かされたユダヤ人たちは、とてもつらかったに違いありません。

収容所を外から見ると中でどんな恐ろしいことが行われていたか、想像することはできません。敷地に入るとたくさんのレンガでできたバラックがあり、木も植えられて道もしっかりしていました。これは刑務所として見せかけ、大量虐殺が行われている強制収容所だとわからないようにカモフラージュするためだと言われています。

アウシュヴィッツで一番衝撃的だったのはナチスに取り上げられた大量の遺品を見たときです。靴、メガネ、食器などが数えられないほど、部屋いっぱい積み上げられていました。ある部屋には返してもらえなかったのか、名前が書かれているカバンが積み上げられていました。しかし、これらの荷物は持ち主には返されることはなかったのです。

ここにはヨーロッパ中から130万人の人たちが連れてこられたそうです。ユダヤ人だけ

ではありません。ポーランド人、ロマ、ソ連軍人、そのほかにも同性愛者、精神・身体障害者、反独分子の人々も連れてこられました。ハンガリーからは43万人のユダヤ系ハンガリー人が連れてこられました。これはヨーロッパ各国からの連行者の中で一番多い数字でした。

収容者の130万人のうち110万人ほどが殺されたといわれています。

アウシュヴィッツにはアンネ・フランクが短い期間ですが収容されていました。アンネの日記はハンガリーではそれほど知られていないので、今まで聞いたことがありませんでした。しかし、アウシュヴィッツに行き、興味を持ったので、読んでみることにしました。

アンネの日記は、ナチス統治下のオランダで暮らしていたアンネ・フランクと言うユダヤ人少女が付けた日記です。



日記には13歳の少女の視線から見た世界が書かれています。素直な気持ちや、感情が表現されていて、ナチスから隠れながらいつ捕まるか、ピクピクすこす毎日や伝わってきませんが、急にその人生が変わってしまいました。将来の希望に満ち溢れた生活から、ナチスの迫害を受け、何年ものあいだ、家から一歩も出られない生活をしなければならなかったの

です。その不自由な生活にもかかわらず、アンネは希望を捨てることなく、強く生きて行ったところに感心しました。結局、アンネは、ベルゲン・ベルゼン収容所に移送されて、チフスで病死してしまいました。

アウシュヴィッツでは中谷さんという方にガイドしてもらいました。彼はよく「想像してみてください」と言いました。文化的にも、経済的にも発達していて、民主的な政治が行われていたドイツで、何故ユダヤ人を迫害するなどということが行われたのか。多くの人は事なかれ主義でヒトラーについたのが原因かもしれませんし、無関係の人たちは無関心で何もなかったのにも原因があるかもしれません。

それからまた、中谷さんは言いました、「想像してみてください」。収容所のすぐ隣にはアウシュヴィッツの所長ルドルフ・ヘスの家があり、そこに家族みんなに住んでいました。彼はまじめで教養のあるお父さんでした。しかし、国のために尽くし、命令通りに従って何千、何万の人殺さなければならなかったのです。極悪人でもない普通の人が、戦争になれば、無実の人を殺すようになってしまうのです。

ここで起きたこの悲劇は今の時代に生きる僕らの責任ではありません、しかしこの悲劇を再び起こさないという責任はあります。今僕のできることは世界中で何が起きているか、ニュースや本などを読み無関心にならないこと。現在と過去を知るように努め、善悪の判断力を身に付けることです。

最初はアウシュヴィッツに行きたくありませんでした。しかし、今は行って本当に良かったと思っています。インターネットや書籍で読むだけでは、分からないこと、感じられないことを体験できたからです。もしアウシュヴィッツに行く機会があったらぜひ中谷さんのガイドを聞いてみてください。

(もちづき・みお)



GCSEのこと

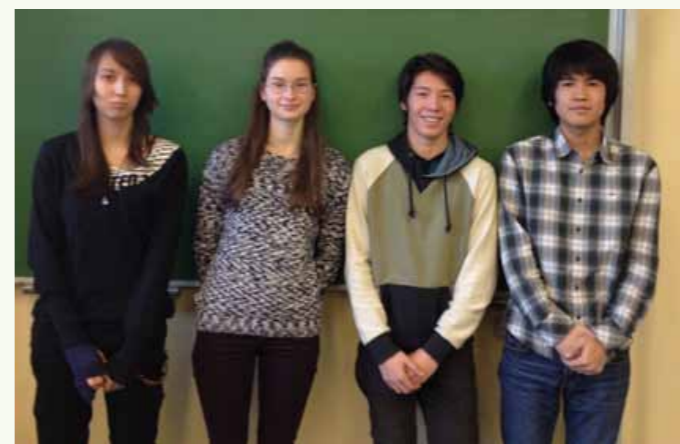
みどりの丘日本語補習校
高等部 畑山 去来

私は日本の学校に行ったことがない。父の仕事の都合で幼稚園を卒業する前にイギリスに住むことになり、小学校に入る前からブリティッシュスクールに通い、その後も数カ国を転々とし、その都度、違った国のブリティッシュスクールに通ってきた。だから、もうかれこれブリティッシュスクールでの経験は10数年になるが、いまだに戸惑いを隠せない部分や、日本にいる旧友と話しているとかみ合わない所が多くある。その中でも一番日本と違い、戸惑うであろう(私もいまだに戸惑う)システムが、GCSEというイギリス独自のシステムである。そこで、これがどういうものなのかを説明したい。

このGCSEとは、General Certificate of Secondary Educationの略で、イギリスの16歳までの義務教育機関を修了した事を証明する、イギリスでは最も一般的な証明書だ。一般的には16歳、もしくはYear11の終わりにセンター試験のような全国統一の試験があり、その試験の結果によってGCSEのグレードが決まる。グレードはU、G、F、E、D、C、B、A、A*と続き、A*が一番よくGがグレードとしては一番悪い。UはUngradableの略でGCSEのグレードがもらえないことを意味する。

そして多くの人が戸惑うのが、この試験のGCSEグレードで、多少の例外はあるが、試験の結果であるグレードのみが成績として考慮されることだ。たとえば、学校にずっと行かず試験のみを受けた人でも、試験の結果(グレード)が同じなら学校に皆勤した人と成績が同じということだ。

それに加えて、GCSEの特色として、教科書の代わりにSyllabusがあることだ。これはセンターが指定する、GCSE受験のために学習すべき事柄のリストのようなもので、先生たちはこれに沿って授業をする。先生たちは基本的に教科書を使わず、このSyllabusをもとにして授業を作り上げ、生徒たちにSyllabusを叩き込む。身も蓋もない言い方をすると、テストに出る事柄のリスト、いわゆる「範囲」のようなものかもしれない。だから、このsylla-



高等部4名。右端が畑山君、その隣が望月君

busを知っていないと、統一試験でいい成績を残すことはできない。そして、このSyllabusには14-16歳(Year10~Year11)の2年間で終わるのが一般的で、この2年間は先生も変わらないしクラスメイトも変わらない。長い「1年」のようにも感じる。

この2年間が終わると、最後にテストがある。この全国統一試験の前は学校全体が異様にピリピリとした空気に包まれる。なぜなら、前述したように、2年間の勉強がこの1時間から2時間のテストの結果によっては、無駄になるかもしれないからだ。

そしてもうひとつ、GCSEのグレードはイギリスの大学に入るのに重要なことだ。これもイギリス独自のシステムなのだが、イギリスの大学に申し込む時、生徒はまだIBやA-Levelのような大学入学のために必須な高等教育コースを修了していない。したがって、その生徒が在学する学校は大学側に対して、この生徒はIBもしくはA-levelでどの様なグレード

を取れるかという「見込み」を送る。日本の例で言えば、内申書を送るようなものだ。それで大学の合否が決まってしまうと、学校側はグレードでも捏造できるため、その「見込み」に信憑性を持たせるために必須なのがGCSEのグレードである。もちろん、GCSEでCを取った生徒がA-levelでA*を取ることは不可能ではないが、GCSEでA*を取った生徒と比べると大学の書類面接で落とされる可能性が高くなる。だから、前述した通り先生たちは生徒たちにいい成績を残してもらいたいと願っている。

私は今まさにGCSEを終えようとしている。私はYear11を終えるまであと3ヶ月ちょっとで、もう終わりまで秒読みというところまで来ている。この時期の学校の雰囲気は、既述したとおり、ピリピリとした異様な感じになる。ここまで来ると、授業は基本的に復習のみで、宿題も過去年度のテストを繰り返

しやられる。そして、GCSEがどれほど大変で重要なかなどを全科目の先生から耳にたこができるくらい聞かされる。私はブリティッシュスクールに人生の半分以上通っているが、こんなことは初めてだった。前の学年までテストはあったものの、あくまで学校内部で作成されて学校内部で採点されるものである。採点している人は私のことを知っているし、私も採点している人を知っているから、融通が利いた。悪く言えば井の中の蛙、ぬるま湯に浸かっていたに過ぎない。競争相手はクラスメイトだけだったからだ。しかし、GCSEは違う。競争相手はこの同じテスト受けている全員。そして今の競争的な社会そのものだと思う。世界的にみると大学進学率平均が60%を超えていて、そしてそれが右肩上がりだということを考えると、今の学生たちはどれだけの競争を強いられるか分かるだろう。より多くの学生たちが競争をし合えるから、私はGCSEを素晴らしい制度だと思う。

(はたやま・さいり)





工夫を惜しまない大切さ

～みどりの丘日本語補習校学習発表会～

桑名 一恵

学習発表会は、日本と同様に、毎年年度末に行われる補習校の大切なイベントです。

土曜日の午前中という本来なら、ゆっくり休みたい時間を日本語学習に励んできた子供たちと、多大なるサポートで親身になって

取り組んできて下さった諸先生方の総まとめを発表する機会でもあります。保護者の私たちにとっても、それぞれの子供たちが日本語に対して、そして日本語から広がっていった日本というそのものを、今現在どのように感じているのかということを知ることができる良いチャンスです。

今年度の発表では、低学年は「数字や曜日」の暗唱、音読劇「お手紙」、「富士山」、「こわさ」について調べたり感じたりしたこと

を発表。高学年は、歴史上の人物がテーマになり、「伝記」、「宮沢賢治」、「太宰治」といった作品を感想文や寸劇、群読で私たちに魅了させてくれました。

リハーサルも貴重な時間、各先生方が動画をとり写真を撮ったりしながら最終チェック。緊張と不安の残る生徒たちを少しでも万全な体制でステージに立たせようという意思が強く伝わってきます。週に1度4時間程度の授業という限られた時間の中で、補習校で用意できる最小限の道具や材料を使って、それぞれの学年が工夫を凝らして観客を魅了してくれました。

基本的には準備するものは、画用紙に絵や文字を書いたり、お面を作ったり、お習字をしたりと殆どの工程が手作り。音楽を簡単に流せるような設備もないので、そのような環境の中、年間の学習の成果をただ披露するだけでなく、どのように大きく魅せていかなければならないのかという事を考えて実行していく各先生のアイデアには脱帽しました。また、それを受けて生徒たちが素晴らしいステージを披露するという一連の流れはとても大切なプロセスになっていると思います。

普段はハンガリー語や英語といった言語で生活する子供たちにとって、当地で日本語を重視して学ぶことはかんたんではありません。日本語を第1母語あるいは第2母語とするように子供たちには頑張ってもらいたい、そのために保護者もサポートを惜しまないことを改めて感じさせられた一日でした。

(くわな・かずえ)



学習発表小学1年生



学習発表中学2年生

日本人学校

リーダーとしての経験を通して

木村 優菜

私は今年、前期児童会長、夏期合宿副実行委員長、ハンガリーダンス副リーダーなど人の上に立つことが多かったと思う。もちろん辛いこと大変なこともたくさん経験した。だからこそ、今まで分からなかったリーダーの気持ちが分かったり、苦手だったことが出来るようになったりした。

前期児童会長になるために、大きな一歩を踏み出す必要があった。私に大役が務まるのか、最初はすごく不安だった。なぜなら、私は積極的に意見を述べたり、人前で話したりすることに苦手意識をもっていたからだ。

5年生の時、学級委員を経験したが、皆を思うように上手くまとめることができなかった。だから、今回こそは、という思いで、私は児童会長に立候補したのだった。

児童会長になってからの一番の大仕事、夏期合宿に向けての取り組みが始まった。リーダーとして最高学年としての初めて経験することがたくさんあり、戸惑うことが多かった。例えば、夏期合宿保護者説明会。そこで私

は、初めて大人の人に話をするようになった。今までに感じたことのない緊張感をもって取り組んだ。家では家族に、学校では、クラスメイトや多くの先生方に聞いてもらいアドバイスをもらった。そのおかげで説明会当日は落ち着いて保護者の方々に話をする事ができた。人前で話すことは難しいという苦手意識を克服できた瞬間だった。

もう一つ心に残る大きな仕事は、ハンガリーダンスのリーダーだった。6年生にとって最後のハンガリーダンスだから絶対に成功させたい、とはりきっていた。しかし、頑張っても気持ちは空回りするばかり。自分がやりたいと立候補したにも関わらず、何度も心が折れそうになった。そんな中でもここまでやってこられたのは、「仲間」の存在があったからだと思う。どんな場面でも一生懸命に取り組んでいる人がいた。私の話を聞きながら聞いてくれる人がいた。意見を求めたときに、意見を出してくれる人がいた。私達リーダーをしっかりと支え、輝かせてくれる人がいた。練習風景や本

番の様子を思い出す時、必ずそういう「仲間」が頑張っている姿が心に浮かぶ。それだけ、私にとって仲間の存在は大きく、刺激を受けた。そして、リーダーとしてやりきれた時の達成感、充実感の大きさを初めて実感した。今まで分からなかった「リーダー」の気持ちが分かった瞬間だった。

振り返ると、ハンガリーダンスのリーダーを務めることができたのは、前期児童会長を務めたからだと思う。何かをするたびにアドバイスをくれたり手伝ってくれたりしたクラスメイト、いつも私を支えてくれた5年生を含む下級生、何をするにも私のいいお手本だった中学生、それから私に自信を与えてくれた先生方がいたからだと思う。この経験が私を見違えるほど大きく成長させてくれた。この貴重な経験を「ただの思い出」として心に残しておくのではなく、自分自身の「自信」に変え、残りわずかな小学校生活、新しくスタートする中学校生活に生かしていきたい。

(きむら・ゆうな)

これからの新しい生活

小泉 凱斗

8月、母親と姉と私の三人はブダペスト空港に降り立ち、そこからタクシーで宿泊先のホテルに行った。夏だというのに外は涼しく道路には意外と多くの車が走っていて驚いた。次の日から一週間程、色々な観光地を巡った。ヨーロッパらしい建物など、街並みも綺麗でいい町だなと思った。しかし、この時はまだ日本の高校へ進学するか、ハンガリーの高校へ進学するか決めきれずにいた。答えが出ず、不安を残したまま日本へ帰国した。

日本に戻ってからもしばらく答えは出なかった。不安だけが大きくなり、勉強への意欲も無くなっていった。そんな生活が続いたが、親の説得もあり私はハンガリーに来ることを決めた。外国での生活に興味があった。夏休みにハンガリーを訪れたことが一番の決め手となった。

私の生活は変わり、日常の中に「英語」の存在が大きくなった。また、日本で過ごす残りの時間が一刻一刻と過ぎる中、私は心残りがないように、友人達との時間を大切にしたい。友人達やクラスメイト、部活動の後輩との別れが

訪れると悲しさや寂しさから、私は涙が止まらなくなった。

11月、私は再びこのハンガリーを訪れた。その頃には、不安よりも期待が大きくなっていった。これからの新しい生活に。そして、私はこのブダペスト日本人学校に転校してきた。転校は初めての経験で、私のいた学校とかなり違う環境だったので、戸惑いが多かった。例えば、日本の学校では1クラス30程度だったが、ここでは学年で3名しかいないこと、中学生も小学生も同じ学校に通っていることだ。

まだ学校生活に慣れていない私に、2人の同級生は積極的に声を掛けてくれ、とても嬉しかった。それ以後、私は学年を問わず喋るようになり、中学1、2年生達とも仲良くすることができた。

授業も少し違った。とくに体育だ。体育は中学生全員で受けていて、それぞれの学年同士の壁がない。全員が一つのクラスのような仲の良さで、この輪の中に入って一緒に体育をするのが、とても楽しかった。ハンガリー語の

授業も中学2、3年生と一緒に受けることがとても面白かった。

そんな中、私はドナウ祭で、中学部の太鼓演奏に参加することができた。最初は、うまく演奏することができなかったが、野村君と山岸さんが教えてくれて次第にできるようになり、発表当日は一番うまくできて嬉しかった。短期間でも色々な思い出をつくることができた。私はこのブダペスト日本人学校に来て良かったと思っている。新しい友人ができたことや、自分が知らなかった自分に出会えたことだ。人見知りであると思っていた自分が、ここに来て、知らない人と会話するようになった。これは自分でもびっくりした。

卒業後は、英語で授業を行う学校に進学するので、これからはもっと英語の学習に力をいれていきたい。また、この学校で学んだいろいろなことを活かしていきたい。

自分がやりたいことがまだ決まっていないので、高校生活の中で決めて、その夢を叶えるために頑張っていきたい。(こいずみ・かいと)





2014-2015年度リスト音楽院ディプロマコンサート情報

■4月17日(金) 16:00 旧リスト音楽院コンサートホール

伊藤 さやか (大学院クラリネット科)

曲目: ジョルジュ・オーリック: オーボエ、クラリネットとファゴットのためのトリオ
ヴァイダ・ゲルゲイ: 光と影—トレモロ, ブラームス: クラリネットソナタ第2番
モーツァルト: クラリネット協奏曲

共演: アンヘラ・カルボリオス(オーボエ) 吉野千織(ファゴット)
ヘルナディ・ヒルダ(ピアノ)
金井俊文(指揮) リスト音楽院学生有志オーケストラ



■4月22日(水) 19:00 リスト音楽院大ホール

橋本 専史 (大学院チェロ科)

曲目: バッハ: チェロ組曲ニ長調 BWV 1012プレリュード、サラバンド、ジューク
ドホナーニ: 弦楽トリオによるセレナーデ
プロコフィエフ: シンフォニー・コンチェルト

共演: ジュルジ・ボガールカ(ヴァイオリン) ナジ・テオドーラ(ヴィオラ)
リゲティ・アンドラーシュ(指揮) リスト音楽院学生有志オーケストラ

■5月12日(火) 15:30 リスト音楽院大ホール

花岡 沙季 (大学院ヴァイオリン科)

曲目: バッハ: 無伴奏パルティータ第2番よりシャコンヌ
リヒャルト・シュトラウス: ヴァイオリンソナタ作品18
バルトーク: ヴァイオリン協奏曲第2番

共演者: 萩原由理奈(ピアノ) 指揮: ケレメン・バルナバーシュ
パンノンフィルハーモニックオーケストラ(ペーチ市)



■5月14日(木) 19:00 リスト音楽院ショルティホール

服部 志野 大学院ピアノ科

曲目: ハイドン: ピアノソナタ 変ホ長調 Hob. XVI 49
リスト: 3つの演奏会用練習曲, ドビュッシー: 映像 第2集
バルトーク: ハンガリー農民の歌による即興曲 Op.20

■6月12日(金) 19:00 リスト音楽院ショルティホール

須田 瑞穂 (大学院ピアノ科)

曲目: スカルラッティ: ピアノソナタ K.481・K.466
ベートーベン: ピアノソナタ No.26 変ホ長調、
リスト: パラードNo.2, シューマン: ピアノ協奏曲 Op.54

共演: メドヴェツキー・アーダーム(指揮)
マーヴ交響楽団



■6月18日(木) 19:00 リスト音楽院大ホール

金井 俊文 (大学院指揮科)

曲目: ベートーベン: レオノーレ序曲第3番 作品72a
ラヴェル: ピアノ協奏曲ト長調
チャイコフスキー: 交響曲第5番 ホ短調 作品64

共演: 藤原 新治 (ピアノ) コンチェルト・ブダペストオーケストラ



高等部4名。右端が畑山君、その隣が望月君



アウシュヴィッツ強制収容所

注意: 無料コンサートですが、リスト音楽院大ホール及びショルティホールでの公演はリスト音楽院本校舎内にあるチケットセンター(1061 Budapest, Liszt Ferenc tér 8.)でチケット予約する必要があります。
Email: zeneakademia@interticket.hu Tel: (06-1) 321-0690




コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0  日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書



ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円